

# 太神宮 あちこち

第10回

## 度会国御神社・大津神社(下)

神宮禰宜 石垣仁久

### 四

確かに守良神主が言うように、内宮撰末社の祭神と荒木田氏の祖先神は交錯しませんが、同氏の祖先祭である三月の山宮祭と、四月の氏神祭の祭場として、特定の神社と関係があったようです。

さて、度会氏が主張する度会国御神社の祭神名に疑義を抱いた守良神主は、国津御神は美称で、その実態は度会の大国魂神であろうと考察しました。それぞれの土地(国)には固有の魂があり、それを国魂と呼び、神として祀られる場合、大国魂神と称されることが多く見られます。

国御神社も大国玉命であろうと考えたのです。「大国玉と称へ申せるは、此度会の地に功德ます神なるべし」(大国魂と称賛するのは、この度会の地に功德があった神だからだろう)と言

い、外宮には外に度会大国玉姫神社もあることも併せて考えるべきだとします。

実際、外宮近辺には草奈伎神社や大間国生神社など、度会氏の出自に関する神社が点在しています。草奈伎神社は、剣に宿る霊力、即ち開拓器具の神格化、大間国生は広い土地を生成した自然の神格化、そこに度会氏の祖先神のイメージが重ねられているようです。

### 五

度会国御神社と大津神社へ向かう森の中の参道の両側を観察すると、参道に沿って微妙な段丘になっているのが判ります。これはかつて宮川支流がここを西から東へと流れていたなごりと思われま

鎌倉時代に度会行忠が著した『神名秘書』に、度会国御神社は、「沼木郷山田村に在り座す」とあるので、当時は外宮域内ではなく、山田村のどこかであったようです。

また、同時代の度会元長『内外宮諸社記』は、文明年間(一四六九〜八六)頃まで外宮と堀を隔てた所にあり専属の神主もいたが、鎮座地不明となったと記しています。

更に、御巫清直『二宮管社沿革考』は、国見社は前野村(現在の八日市場町付近)の氏神となり、社殿が無く大きな藤があったので藤社と称し、そこに世義寺が出来て、国見社は仏堂となった。寛文大火(一七六〇)の後、世義寺と共に国見社も他所に移り、やがて廃絶したとの伝聞を記しています。(但し、藤社は本来は国見社とは別の神社で、現在は八日

市場町の坂社に合祀されています)

このような説を総合すると、旧社地は現在地と存外近接していたのかもしれませんが。

六

度会国御神社の奥に鎮座しているのが末社の大津神社です。この神社は外宮の末社で、撰社の度会国御神社と比べると、社殿がひとまわり小さいのが判ります。大津神社については、史料が少なく、祭神名や旧社地など不明です。

一般に大津と言えば港を連想しますが、必ずしも海に面しているとは限らず、勢田川を遡上した竹ヶ鼻か阿竹ではないかという説もあります。

明治六年に大津神社を再興するために旧地の調査が行われましたが確定に至らず、現在地に再興されました。

古代の度会地方は「百船の度会」と称されたごとく、宮川支流が複雑に入り組み、そのため水利に優れた土地でした。大津神社はその基点にあつたと思われま

七

はじめに記したように、神社の歴史を知る上で、撰末社の存在が大きな鍵となることがあります。今回ご紹介した外宮域内の二社も、祭神や旧地などに不明な点も多くありますが、いつかそれが解明され、古代伊勢地方における国魂信仰や、水運の変遷などについて、明らかにすることも多いはず

そのようなことを想いながら神宮の撰社や末社を、一社一社ゆっくりと探訪するのはとても楽しいことです。駆け足の巡拝では見過ごしてしま

(了)